

「おもしろいよ」「ずっと勉強になるよ」といわれていたり、生の臨床現場を肌で体感するとても刺激になるもので、毎日が復習と自己研鑽と反省の日々となりました。同時に、これまでの座学による講義がどれほど大事だったか痛感されるものでもあります。「ポリクリ」から「クリニカル・クラークシップ」へ、学生自身によるより主体的な参加を求められるような教育体制に徐々に移行していますが、自ら学ぶためにはそれ相応の基礎知識と学力が必要であったことを、あらためて肌身に感じています。

そんな充実した病棟実習ではありますが、それでも学生はやっぱり学生で、皆あいもかわらずバイトに部活動にとそれぞれの活動に励んでいます。私も全学の体操部にいまだ在籍中で、慌ただしい実習スケジュールとレポート提出の合間を縫っては体育館へ足を運んでいます。「自由に身体を動かすことができる」ということがどれだけ素晴らしいことであるか、患者さんと触れ合っていて最近はとくに強く感じる場所でもあります。

さて今年はどういうわけか、琉大祭で公演する体操部のデモンストレーションを私が監督することになりました。例年大盛況となっている公演で、たくさんの方々から評価いただき、部員としてもとてもやりがいがあるものです。しかし同時に監督者というのはとても責任の重い立場でもありました。

案の定、準備期間は実習との両立で大変苦しみました。距離と時間の制約から現場を直接監督することができず、私自身、何度もリーダーとしての資質を問いながらも、なんとか指揮し続けました。指示を出し、報告を受け、いまどう進行しているのかを想像する。うまくいっていない箇所の原因を検索し、対応を検討し、適切な処置を施す。事務的な手続きをこなしながら、ようやく空いた時間に公演の構成という創造的な仕事をひとりする。たくさんのお力を借りて、どうにかこうにか公演当日までこぎつけることができました。

今こうして振り返ると、それは自分があと数年後にしているであろう、臨床現場での自分自身の姿であることに気づきました。チームのリーダーとして、スタッフを指揮する立場にあってどうふるまうべきか。あるいはチームのスタッフとして、リーダーに期待される仕事をこなすためにはどう動くべきか。そして医師としてのキャリアを積む上で、どう自分の仕事を管理するのか。わずか二か月の経験でしたが、これからの何十年も通用する経験をさせてもらえたと思っています。

毎日の病棟実習のなかに、そして課外活動に、自分を成長させる何かがある。そう思うだけでこれからの毎日の振る舞いが変わる次第です。よりよい医療従事者になるべく、これからも自己研鑽に努めていきたいと思います。

背中達に見守られて

渡慶次オースティン誠（4年次）

皆様は、タラウマラ族のことをご存知でしょうか。

「走る民」という異名を持つこの民族は、メキシコの銅峡谷（Barranca del Cobre）のあちこちに散らばっている村落を行き来するため、長距離を“走る”（2日間で400kmを走破する猛者もいる）ことが唯一の移動手段となっています。また、その独特な狩猟方法persistence hunting（炎天下で獲物を幾つかの武装集団で囲み、それが熱中症で倒れるまでジョグで追いかける）も世界的に有名です。

1日に5km以上も走ったことのない懶惰なオースティン族と、この驚異的な走力を有するタラウマラ族は、同じHomo sapiensとして分類されているわけですが、これは遺伝子、環境、文化などの様々な要因が絡み合うことで人類に多様性が許されたという証拠であり、私はこれをきっかけとして人間の環境適応能力、すなわち医学科29期生（現4年次）の目覚ましい変容ぶりに気づくことができました。

諸都合のため、私は講義室の最後方に座っていますが、ここでは同期の様子を色々と窺うことができます。学友達は照れ屋のためか、日頃は行動が言動に伴わないときもありますが、彼らの後ろ姿を見ていると、どこかで読んだ「背中が嘘をつかない」という言葉を、いつも思い出してしまいます。

つい最近まで、体育会系の部活動に属している者は、「ニシタイ（西医体）」という合言葉のもとに、学業を疎かにすることなく、勝利という目標に向かって連日連夜の肉体鍛錬に励んでいました。彼らから放散される

